

# お盆 Part 1



ホオズキ

お盆は先祖の霊を迎えて供養する行事で、一般的に仏教の行事と認識されています。しかし日本には古くから、正月と盆に祖先の霊を迎える「魂祭り」という習わしがあり、盆行事は、仏教とは関係なく行なわれていました。現在のお盆は、日本古来の神道の行事である先祖供養と仏教行事の盂蘭盆会（うらぼんえ）が融合して生まれたと考えられています。

お盆は仏教用語の「盂蘭盆」の省略形として呼ばれるようになりました。盆とは文字通り、本来は霊に対する供物を置く容器を意味するため、供物を備え祀られる精霊の呼称となり、盂蘭盆と混同されて習合したともいう説もあります。そのため現在でも精霊をボンサマと呼ぶ地域があります。

## 日本の先祖供養の行事

お盆の明確な起源は分かっていませんが、日本では古くから一年に二度、初春と初秋の満月の日に祖先の霊が子孫のもとを訪れて交流する行事がありました。初春のものが祖霊の年神として神格を強調されて正月の祭となり、初秋のものが盂蘭盆と習合して仏教の行事として行なわれるようになったとされています。

日本では、地方や佛教の宗派により行事の形態は異なるものの、8世紀頃には夏に祖先供養を行うという風習が確立されたと考えられています。

## 仏教行事の盂蘭盆会

盂蘭盆会は釈迦の十大弟子の一人である目連が、堕ちた母親の霊を救い出すために、衆僧に食事を振る舞い、釈迦に教えを乞い、供養をしたことが由来とされます。この供養した日が7月15日だったことから、この日は先祖の霊を供養する日となったわけです。この行事は本来インドのものではなく、仏教が中国

に伝播する間に起こってきたものだと考えられ、中国で成立したとされる盂蘭盆経という仏教の経典に書かれています。

盂蘭盆とは、サンスクリット語の「ウラバンナ」を音訳したもので、「逆さ吊り」という意味だそうです。その逆さ吊りの苦しみから救うための供養として、先祖や亡くなった人たちが苦しむことなく成仏してくれるようにと、子孫が報恩の供養をします。この行事が一般に広がったのは、仏教者以外の人々が旧暦の7月15日を中元節として、先祖に供物し、灯籠に点火して祖先を祭る風習によってだと言われます。この両者が一つとなって、中国での盂蘭盆の行事がいよいよ盛んになっていったと思われまふ。

日本では推古14年に法興寺で催されたのが最初の盂蘭盆会だと言われています。また斉明3年には、須弥山の像を飛鳥寺の西につくって盂蘭盆会を設けたと記され、その後、斉明5年7月15日には京内諸寺で盂蘭盆経を講じたと記録されています。後に天平5年には、大膳職に盂蘭盆供養させ、それ以後は宮中の恒例の仏事となって毎年旧暦の7月14日に開催し、盂蘭盆供養、盂蘭盆供と呼ぶようになりました。

奈良、平安時代には毎年7月15日に公事として行なわれ、鎌倉時代からは施餓鬼会（せがきえ）をあわせ行なうようになりました。また、明治5年に京都府は盂蘭盆会の習俗いっさいを風紀上よくないと停止を命じたこともあったそうです。

## お盆の時期

現在のお盆は7月13日～16日というのが一般的ですが、7月13日～15日という地方もあるようです。日付に関しては時代によっても多少変化したようで、室町時代は7月14日～16日であったとも言われます。どちらにしても15日を含むことには変わりありません。

日本では明治6年1月1日の旧暦が新暦に切り替えられたとき、全国各地域での対応の違いが起こり、現在日本には異なる3つの「お盆」の時期が見られます。

- ①旧盆  
旧暦の7月15日頃が中心（新暦での日程は年によって異なります）
- ②7月盆  
新暦の7月15日頃が中心
- ③8月盆（月遅れの盆）  
新暦の8月15日頃が中心

## お盆にオススメのお花①

### ほおずき

ほおずきは漢字で鬼灯と書きます。これはご先祖様をお迎えする際、精霊は提灯の火を頼りに集まると言われることから、ご先祖様が道に迷わないように、このほおずきを提灯に見立ててお盆に飾るようになったそうです。夏には毎年全国各地で「ほおずき市」が開かれます。浅草の浅草寺の「ほおずき市」は有名です。

### ハス

ハスは、お盆には欠かせない花となっています。蓮は7月盆から8月盆の頃が花盛りであることがお盆に使われる理由の一つとされています。蓮の花は、仏教に密接な関係があり、インド・スリランカの国花です。ハスは仏教の中で最も格上の花、極楽浄土に生える花とされ、紀元前2～3世紀には、仏像が蓮をかたどった台座に乗せられるようになりました。仏様のお座りになるその台座を蓮華座（れんげざ）、極楽往生をとげたあと極楽にある蓮の葉の上に生まれ変わることを蓮華化生（れんげけしょう）などと呼び、蓮は仏教のイメージの強い花。泥の中に生まれても、汚れなく清らかに咲く「清浄無比の花」と尊ばれています。日本には有史以前にインドか中国から伝わったと考えられています。

さらに、ヒンドゥー教でもハスは特徴的なシ

ンボルとされ、命を宿す存在として現れた「はじまり」の花です。ハスは最高の神を生み出した功績が評価され、最高のものに蓮座は付き物という思想になりました。泥から生え気高く咲く花、まっすぐに大きく広がり水を弾く凛とした葉の姿が、俗世の欲にまみれず清らかに生きることの象徴とされたのは元々はヒンドゥー教が根源で、このイメージが仏教にも継承されました。

### ハスの花

ハスの花は精霊棚にお供える花として有名です。仏教では「西方浄土の極楽は神聖な蓮の池」と信じられているため、寺の境内にハス池をつくって植えるようになりました。

### ハスの葉（開葉／巻葉）

ハスの開葉は初物の農作物を備える「水の子」の盛り皿として使われます。仏教ではハスの葉っぱに乗ってお釈迦様に少しでも近づきたいという意味合いがあるそうです。またハスの葉はハス飯に用いられることが多いそうです。

巻葉は塩茹でにして刻み、他の具材やごはんを混ぜ合わせて開葉に盛られたもの、また中華ちまきを蓮の開葉で包んであるものもハス飯と呼ばれるそうです。このハス飯は古くからお盆のご馳走とされていたようです。

### 蓮の実／ハス台

ハスは実の入った花床（花中央の黄色部分）に穴があいており、それが蜂の巣に似ていることから「蜂巣（はちす）」の略でハスと呼ばれるようになったと言われます。また、漢字の「蓮」は、漢名で種子が連なってつくことからそう書かれるようになりました。夏場の若い実は料理用として使われることも多く、漢方や薬膳料理に利用されているそうです。花が咲き、それが枯れると茶色くなります。また枯れて茶色くなった蓮台はドライフラワーにしてお盆のアレンジに使われることも多いです！